九州ルーテル学院大学

Teaching Portfolio

2026

所　　属：人文学部人文学科キャリア・イングリッシュ専攻

名　　前：　　山本　幹樹

作成日：2026 年 5 月 29 日
教員氏名：山本　幹樹
所属：人文学部　人文学科　キャリア・イングリッシュ専攻

1.　はじめに

2022 年度 4 月に九州ルーテル学院大学人文学部に着任した。以来、主に本学の教養英語科目、英語文学、教職関連科目を担当している。専門はアメリカ文学で、特に 19 世紀女性作家について研究を行う。また、文学作品はその多くが映画化されており、映画の果たす役割を、映画文化、映画英語、英語教育の視点から研究を行っている。

2．教育の責任

主に人文学科キャリア・イングリッシュ専攻の科目について担当している。

(1) 授業科目の担当

2025 年度は以下の表の科目を担当した。

科目名	開講年度時期	履修者数	備考
Reading＆Writing 演習Ⅰ	2025 年度前期	25 名	専門教育 週 2 回開講
基礎英文法	2025 年度前期	46 名	専門教育
英語文学概論Ⅱ	2025 年度前期	15 名	専門教育
英語文学購読Ⅰ	2025 年度前期	14 名	専門教育
ビジネス・イングリッシュⅠ	2025 年度前期	16 名	専門教育
卒業研究	通年	8 名	専門教育

■　主要授業科目

英語文学概論Ⅰ・Ⅱ／英語文学購読Ⅰ・Ⅱ

「文学」と聞いて「何やら難しいもの」という印象を持つのは学生だけにとどまらない。私は、文学は人間の重要な生産活動と考える。近年、文学は心理学、経済学、ジェンダーなど様々な分野からのアプローチが行われており、現代の社会で起きている現象について文学から読み解く研究がなされている。翻って、自分の興味のある分野から作品に触れてみるという活動が可能となり、そこから文学へ誘いたいと考える。映画、ファッション、スポーツなど、文学と関わりのない分野はない。身近に感じてもらいながら、味わい、楽しんでほしい

と考え、学習者の興味関心について探りながら共に学修を行っている。

Reading & Writing 演習Ⅰ・Ⅱ

本授業では、主に英語のリーディングとライティングの学習を中心にしながら、リスニング、スピーキングなどの活動も取り入れ、総合的な英語の力を養うことを目標としている。演習であるため、受講者の学習活動が中心となる。そこで自らテキストを探し、それについて内容を把握し、問題について考え、ディスカッションを行うという形式をとる。

また、自主学習を記録するノート課題を出し、個々に合った学習方法を探り継続していく方法を取っている。

ビジネス・イングリッシュⅠ・Ⅱ

ビジネスの現場で使用頻度の高い英語を主に学習する。また、コミュニケーションは、 どのような場面においても起こりうるので、毎回トピックを設定して、それに伴った会話を行っている。同時に語彙、リーディング、リスニング、ライティング学習も行い、総合的な英語能力の向上に努める。

基礎英文法・応用英文法

英文法は、苦手と感じる学習者も多いが、彼ら自身も文法の重要性を認識している。 また、教職に就くことを希望する学生には、教えるという点も習得が不可欠である。そこで、毎回の授業では、担当者を決め、作家、俳優、アスリートなどが残した印象に残るような例文を、文法項目に沿って探す活動を行う。また、テーマごとに短い英文を作成する。自身にとって「忘れられない例文」が一つでもあれば、その文法項目を習得するのは容易になるだろう。

■ 非常勤講師

なし

教育組織運営

なし

３．教育の理念

(1)理念１　課題の設定、問題解決の機会

急速に物事が変化する現代において、学習者は単一的な正答を直ちに求める傾向があるが、物事の問いに対する答えは一つに限定されるものではない。あるいは回答者それぞれの立場で違ってくるかもしれないという多面的な考え方が不足しがちな傾向にある。そこで、テキストを時間をかけて読み込み、時には味わい、些細でも疑問点を大切にしながら問題解決に

向けた取り組みを行う。

(2)理念２ 深く読み込み、自らの意見を培う

早さを求められがちな昨今、文章を深く読む活動が減少傾向にあるように感じられる。 そうした中で、英文の意味を読み込み、考え、また自分に照らし合わせて文章を綴るという活動は重要であると考える。

(3)理念３　情報活用能力の育成

ICT の活用は方法次第で、理解をより深め、また次の課題に取り組むきっかけを与えてくれる。ICT 機器に慣れるだけでなく、それ以上の活用方法を受講者とともに探りながら、教育に活かしていく。

４．教育の方法

教育理念との関係ではアクティブラーニングを中心に以下の点を重視した教育方法を取っている。

(1) 現時点での自身の到達点を知り、そこからどのような目標をもって取り組むかを個々に設定させている。教員自身が個々の到達度を把握しながら、それぞれに合った方法を提案してもいる。また、受講者同士で課題を出し合うなど、学習者の目線で取り組めるような活動を行う。

(2)　学習者に合ったテキストの在り処は、学習者自身が知ると考える。具体的には、興味のあるテーマをもとに英文テキストを探し、読んで内容を理解したのち、自ら問題提起を行い、それに対する自分の考えを言葉にするという活動を行う。それぞれが探し当てたテキストを持ち寄ることで、自身にない視点が得られ、また、次の課題設定につながっている。

(3)　授業において ICT 機器を活用している。ただし、単に視覚情報を与えるというのではなく、自ら課題設定に取り組み、問題解決につながるような授業づくりに努めている。 また、受講者にも ICT の活用を促し、フィードバックを行いながら問題提起を行う。次の課題設定と解決につながるような取り組みとなっている。

５．教育改善のための努力

(1)改善努力１

教職員による授業参観アンケートでは、学生の発表形式等に対する好意的な評価が得られた。また、英語によるインストラクションを中心に行ったことで、学生が積極的に英語を話す環境づくりができたことについて、学生の満足度も高かった。各授業の到達目標や、それに対してアクティブラーニングが必要であることを授業の初めに提示することを徹底し、より丁寧なインストラクションに努めたいと考える。。

(2)改善努力２

授業内外の主体的な学習活動を促すために、学習者一人一人の到達度を把握し、更なる学修を進めるためのインストラクションを丁寧に行っていきたいと考える。

6. 教育の成果・評価

授業内で主体的な学習が盛んに行われたと思われる。特に発表では受講生が自ら工夫し、前回の発表より緻密な準備が行われていたと感じられる。また、ノート課題で、楽しんで取り組みながら自主学習の方法が身に付いたと感じた学生が多くいたようで、ノートの末尾にそのようなコメントが見られた。更に、2024 年度後期の客観テスト（TOEIC IP）は平均スコアの伸びが見られた。

7. 今後の教育に関する課題と目標

授業運営は受講生のスタート時点での学習到達度や必要な活動内容によって異なってくるため、流動的な部分もあるが、教員が事前に到達目標を明確にすること、そのためのスケジュール作成、丁寧なインストラクションやフィードバックも不可欠であると考える。受講生が主体的に取り組むための環境づくりに努めたい。

【根拠資料】

・担当科目シラバス
・授業評価アンケート結果
・CE 専攻会議議事録